

豊後満弘寺市の事

近藤 忠

満弘寺市、又は豊後背戸市は大分より日豊線の下りで四ツ目の驛、坂の市の満弘寺で毎年五月十八日より一週間開帳の日開かるゝ定期の雜貨市で、現今尙市の開かれる初めの一兩日は何等の貨幣の媒介に依らずして、物々交換が行はれてゐる點で興味がひかれる。

この附近一帯、年に一回の市の開かれる土地は少くないが、物々交換の風習が今尙、假令僅かとは言へ残つてゐるのは此満弘寺市只一つである。

然も海と陸との産物が宗教を通じて原始的に交換せられてゐると云ふことは、地理學的に見ても一の研究の對象とはなり得ないだらうか。

満弘寺市は坂の市町の西北に控へた大野川下

流の旺な農業地と東南方に位置したリアス海岸の漁業地との兩者の住民が、年に一度、其の信仰心から同一場所に會合せしめられる結果、自然發生した門前市である。

この満弘寺市に就ての研究としては

萬弘寺考、附萬弘寺市の起源（太田亘、昭和三年十二月、大分新聞）

大分縣坂の市町満弘寺市に關する調査（大分高商商事調査部）の二つだけだが太田氏の萬弘寺考は豊後で有名な眞名之長者傳説より此市に關連した部分だけを拾集めたもので、また大分高商の調査は歴史の方面では、そつくり太田氏の研究を借用してゐる。

たゞ後者は今日の市の有様を相當詳細に調査

して呉れてゐるので、以下其の面白いと思つた
個所の要點を書き抜くこととした。

物々交換による市場は一時衰頹したが、壽永四年平家滅亡の後平家の落人が此の萬弘寺市に顔を見せるやうになつてから急に再び盛大となつて來た。この平家の落人と自稱する漁民は、今でも特に「車^{シャ}」と呼ばれ、言語に著しい特徴を有してゐる。(註、大分縣北海部郡津留村)

彼等は迷信的であり、信仰心が強く、且つ彼等の信仰するものが滿弘寺の本尊と同一な如意輪觀世音であるから、旺に滿弘寺に參詣する。更に彼等の特徴として物々交換を非常に好む風がある。出來ることなら自分の生産物は物々交換に依る方が儲けだと考へてゐるやうである。彼等が居たからこそ、今日まで斯様な原始的な經濟様式を維持することが出來たのだとも言へる。

物々交換を目的として滿弘寺に集つて來る農村人と漁村人は滿弘寺に對して西北と東南とに全く對照の地理的位置に在る。即ち農村地方としては大野郡の一部・大分郡戸次町・高田村・松岡村・瀧尾村・近くは北海部郡丹生村方面等であり、是に對して海岸地方としては北海部郡佐賀關町字玉井・白木・小黑・福水・古宮・室生及一尺屋村・佐志布村^{サシノ}・海邊村等の諸村である。

來集者の正確な人員は分らないが、昭和三年五月十八日朝四

豐後滿弘寺市の事

時二十分より七時十五分に至る間に於ける人員並に來集の狀況は

午前四時二〇分	五人
四時三〇分	一〇人
五時三〇分	三六〇人
六時三〇分	六〇〇人
七時一五分	六五〇人

其から後は増加する様子もなかつたから、六五〇人が最頂と考へられる。而して物々交換は最初より直ちに開始はせられない。午前五時頃に至つて交換が始められたが、此時の人數は約百五十人であつた。集り來る者の内、高田村の如きは春蠶で一番忙しい時期であるにも拘らず全村三百九十七戸の中其の半分位は物々交換に來るさうである。

交換當事者として海岸地方より集つて來るものは、凡て女子であり、男子は此日も出漁せねばならぬからである。此市に到着するのはどうしても未明迄でなくてはならないから、家を出るのは朝の三時頃である。以前は全部徒歩で來

たものだが、今では發動機船の便があるからして大概は之によつて来る。

是等漁村より来るものの内、佐賀關町字玉井白木より来るものが特に多く、此の兩村民は開市期でない、普通の日でも時々坂の市町に來て穀物等と交換して行くものがある。

是に對して山地より出掛けて来るものは、總て男子であり、勿論交換せんとして携へて來るものは農產物及其の副業による生產物である。

滿弘寺市に自己の生產物を持集つて物々交換を行ふことを傳統的な年中行事のひと考ふる心理も存在するが、殊に興味の有るのは山地より來るものは男子であつて、海岸地より來るものは殆ど女子であるからして、其處に一種の遊戲的な氣分を生ずることも亦物々交換存在の一理由であらう。

市に於て交換の目的となる主なる品物は

山地より

農產品(食用)生野菜類、芋がら、千大根、切千大根等
林產品(船具用)棕櫚皮

工產品(家庭用)七島表、蓆、竹籠、桶、篩
海邊地より

農產品(食用)芋の粉

海產品(食用)海藻類、干魚類、榮螺、蝦、蟹

海邊地のものは自己の生產物を以て、山地の生野菜類・棕櫚皮・竹籠・特に七島表・蓆と交換するものが最も多い。山地より來るものは若布・干魚と交換する。若布の如き是一年分位此時に交換して自宅に蓄へて置くと云ふ事である。

芋の粉と交換しやうと思ふものは以前特に袋を用意して來る。松岡村・高田村のものは千大根・切千・芋がら・棕櫚・蓆等を一人當り三圓乃至十圓に相當する位の數量持つて來る。瀧尾村のものは主として蓆を携へて來る。自轉車で來るものが一番多いが、要するに各人が持寄る數量は極めて少量で、海邊地よりのものは籠に入れ、天秤棒に擔ひ得る程度である。交換物品は一般に非常に粗末の品が多くて蓆の如きも其の品質は頗る劣等だとのことである。